戦争を語り継ぐ

～東京オリンピックを前に、1940年東京オリンピック中止の歴史を振り返る～

日時　令和元年10月7日　午後6時
場所　生涯学習都市会館

講師　一橋大学名誉教授　加藤哲郎氏

昨年は関東軍731部隊の細菌戦・人体実験についてお話ししましたが、今回は、2020年の東京オリンピックを前にして、戦前1940年に開催が決まっていたが、日中戦争の拡大によって幻に終わったオリンピックの話をします。この「幻の東京オリンピック」については、2019年のNHK大河ドラマ「いだてん」にも出てきます。前半は「日本マラソンの父」金栗四三、後半が1964年東京オリンピックの招致を実現された田畑政治を主人公にしたドラマですが、1936ベルリン・オリンピックのあたりは、日独伊3国の関係など、時代背景をよく描いていました。大河ドラマでは描ききれなかった、1940年東京オリンピック中止の理由を、日中戦争との関わりで述べたいと思います。

まずは、東京オリンピック招致の歴史をみてみましょう。ポイントは、1940年が、戦前の皇国史観のもとで紀元2600年にあたり、神武天皇を祀る紀元2600年建国祭が企画されていたことです。もともと1920年代から、東京・奈良で紀元2600年記念「建国祭」構想がありました。1931年に、東京市は建国祭の「帝都復興」オリンピック招致を決議し、32年にIOCへ立候補しました。しかし候補都市は多数で、1940年はローマが有力候補でした。1936年ベルリン・オリンピック時に、ムッソリーニのローマとの競合を、ドイツのヒトラーの仲介で、40年は東京、44年にローマ開催とIOCが決定しました。これが、日独防共協定から日独伊3国同盟へとつながりました。

それは、日本で軍部の力が強まり、日中戦争から太平洋戦争に進む過程と併行します。1936年2．26事件、37年盧溝橋事件・日中戦争泥沼化で、もともと「世界平和の祭典」であるオリンピックに消極的だった軍部は、「国家非常時」だとして非協力になります。軍人の馬術選手の引揚げや、ギリシャからの「聖火リレー」ではなく、神話にもとづき国内のみで祝う「天孫降臨神火リレー」に変更せよなどと難癖をつけます。巨額の国費が戦争に費やされ、1938年7月近衛内閣のもとで、東京オリンピックはIOCに「返上」されます。IOCは1940年開催地をヘルシンキに変更しますが、第二次世界大戦勃発で中止になり、44年も開けませんでした。連合国に敗れた日独伊枢軸国は、戦後ローマが1960年、東京は64年に初開催となり、72年のドイツは、ベルリンではなくミュンヘンで開かれることになりました。

日本国内の問題として言うと、実は、東京オリンピック招致はもともと脇役でした。紀元2600年建国祭が主役で、オリンピックはそれに合わせて計画されました。もう一つ、建国祭への便乗企画がありました。それは東京万国博覧会で、紀元2600年は、①神武天皇奉納建国祭、②万国博覧会、③オリンピック誘致の三位一体で、国際社会の中で「大国」となった日本をアピールする予定だったのです。

ところがそれを準備する政府の思惑は、実はばらばらでした。優先順位は①②③でした。①建国祭を主導した内務省は、国家精神による国体明徴・挙国精神総動員、挙国一致・八紘一宇を唱える紀元2600年祭に、②③で花を添える計画でした。そのため神話にもとづけば本来建国祭は2月11日の紀元節（今日の建国記念日）でしたが、春は②万国博覧会で世界の注目を集め、夏は③オリンピックにして、①建国のメインイベントである大祭を11月に配し、一年中国民総動員で徐々に盛り上げる計画でした。②の万国博覧会は、もともと東京市の関東大震災「帝都復興」のアピールと、29年世界恐慌後の商工省・商工会議所・財界の失業対策・産業振興（勧業）・観光客誘致・外貨獲得の思惑が結びついたものでした。しかし「大東亜共栄圏」を目指す実

質的国策でありながら、アジアで初めての万博として「東西文化の融合」を謳ったタテマエとホンネの矛盾が万国博覧会協会で問題になり、国際的に孤立し「延期」となりました。オリンピック「返上」と同時で、38年7月近衛内閣の閣議決定です。

結局③東京オリンピックは、「国民体力向上」を謳う文部省と外務省・東京都がバックで、万博よりもさらに基盤が脆弱で、軍部の圧力と大蔵省の予算削減に抵抗するすべはありませんでした。実際の1940年は、①天皇制万歳の紀元2600年建国祭だけに終わり、41年日米戦争に突入したのです。もっとも準備は進められていた②万博は朝鮮大博覧会、国防科学大博覧会等ミニ万博に、③オリンピックは植民地から選手をかき集めた「東亜競技大会」として、小規模に実施されましたが。

2020年東京オリンピックへの教訓として、最後にまとめると、招致を可能にしたものは、①経済的発展、②国際協調主義、③欧米文化への憧れ、④反対意見、批判勢力を排除した天皇制ナショナリズム、⑤熱心な誘致グループ・リーダーの存在（永田東京市長、嘉納治五郎ら）でした。開催を挫折させたものは、①日中戦争と国際的孤立、②日独伊3国同盟に従属、③戦費優先の財政逼迫。④軍部の横暴、官庁のセクト主義と議会政治の非力、⑤紀元2600年建国祭「八紘一宇」と「世界平和の祭典」「東西文化の融合」の本質的矛盾、「大東亜」優先思考でした。こういう歴史から、何を学ぶのかが問われています。

早池峰神楽ユネスコ無形文化遺産登録10周年記念祝賀会に出席

10月20日大迫ふるさとセンターで開催された祝賀会に花巻ユネスコ協会より、照井顧問、髙橋顧問、押切副会長、永井、藤井、堀合が出席し、照井顧問が祝辞を述べ、10周年を参加者皆で祝いました。

ユネスコの窓

着物でオペラ顛末記

伊藤　マヤ

この冬、旅の達人エミコと二人、財布に優しいミラノ旅行が実現した。国内旅行並み。しかもアリタリアの直行便だった。目的はスカラ座で、着物でオペラを観ること。演目はグリゴーロ主演の「ロメオとジュリエット」。エミコも私もこのイタリア人テノールの大ファンである。ツアーではないので手間はかかるがチケットは原価である。今回は交渉上手のエミコに感心しきりの旅となった。

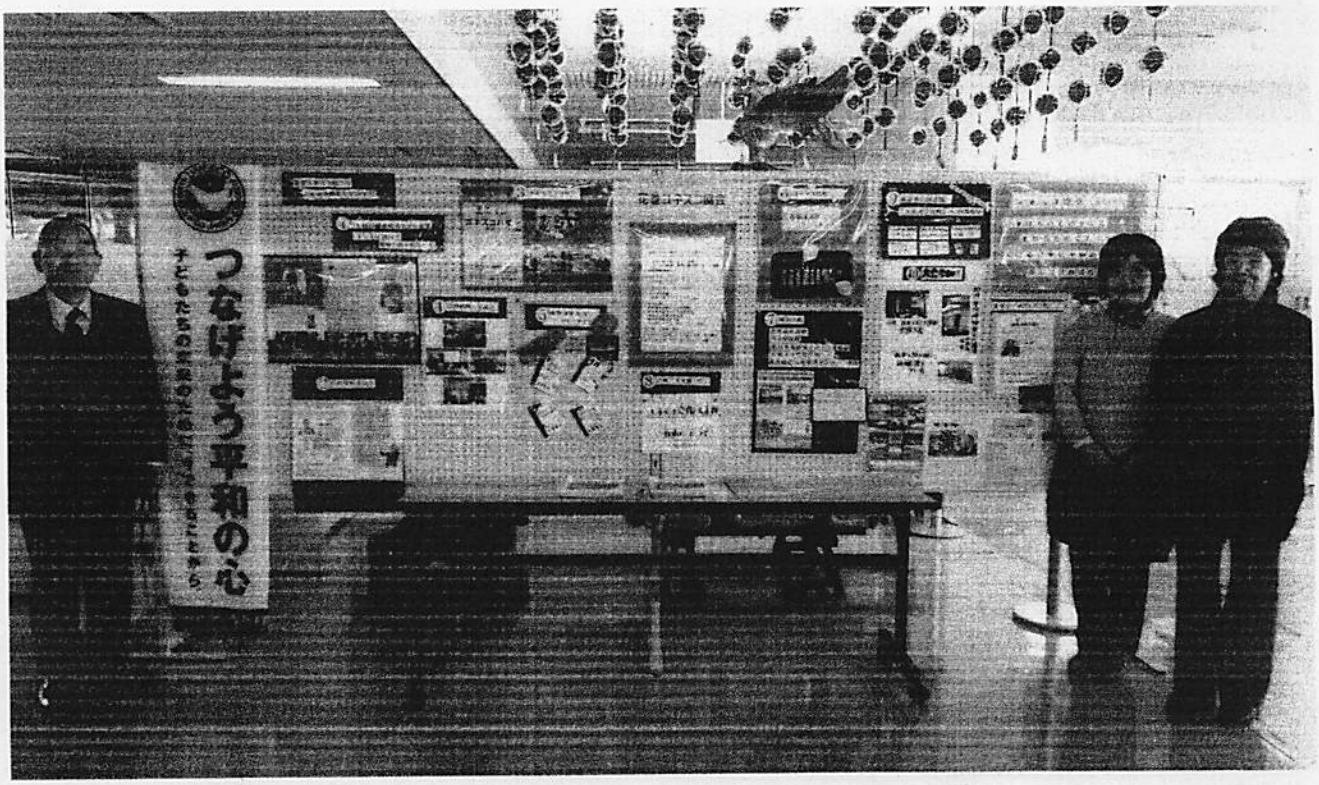
飛行機のエコノミークラスは狭い。足を延ばせない十三時間はつらいと思っていたらエミコがさっさと掛け合って、前が広く開いている最前列に席替え。頼めば何とかなるのよ、とのこと。彼女はスカラ座の席も当日券。私より三割安く購入した。並ぶ、掛け合う、交渉する。よく海外の蚤の市で値段交渉するテレビ番組を見るが、交渉は単なる値切りではなくヨーロッパ流コミュニケーションなのだろう。融通が利く、アバウトなこのイタリア気質が結構私の性に合っている気もした。

到着は夜。トランクが二つの私は、読みが甘かった。傾斜が多い。駅からホテルまでトランク二つでよたよた歩いた。翌日のオペラはぞうりが誤算だった。宿泊先からスカラ座まで徒歩四分のはずが固い石畳のせいで二十分もかかりすでに疲労困憊。しかし今回最大のまさかはそのスカラ座の幕間休憩の時に起きた。再開の八分前に行ったトイレは、施錠されて開く気配なし。開演が迫る。一分前、転がり出てきたのはカップル！怒りつつも用を済ませたらベルが鳴った。後ろドアから入ると、係員に止められた。イタリア語で、もう前には行くな、後ろで見ろと言っている。冗談じゃない！ここで米粒のようなロメオを見るために日本から来たんじゃない。私は脱兎のごとく前の座席へと走り出した。ノーノー!!後ろで何か言っているが日本人だから分からないことにした。オケの前まで来たところで指揮棒が振り下ろされるのが見えた。グノーの優雅な旋律を聞きつつ私はゆっくりと歩いて前から三列目の席に着いた。その夜は満席、カーテンコールは拍手と歓声。最高の名演だった。やれやれ、何とかなった。しかしよく考えると「やってしまった」のだ。一階フロアを駆け抜けるとは。天井桟敷席からでも見えるど真ん中の通路である。ああ、失敗と思いつつホワイエに出ると先ほどの係員と目が合った。ごめんなさいねと言いかけたら、にっこりして「サンキューマダム。」終わってしまえば気にしない。イタリアの鷹揚なお国柄にまた触れてほっとした。あとは「制止を振り切り必死の形相で猛ダッシュした着物の日本人伝説」が残らないことを祈るだけである。

花巻ユネスコ協会会報
天末線

花巻ユネスコ協会
花巻市石鳥谷町南寺林5-142-8
ＴＥＬ　0198－26－5418
第74号
発行責任者　三田　望
発行日　２０２０年３月５日

「国際フェア.in花巻２０１９」で活動内容を紹介



目標があれば楽しめる

花巻ユネスコ協会　会長　三田　望

私は子供の頃、神奈川県大磯で過ごした。父は請われてある小さな金属系商社の番頭をしていた。戦後の荒廃した世相の中、経営は困難を極めていた。給料の遅配は日常茶飯で、その為明日の食事にも事欠く有様であった。

昭和21年、両親は満州から引き揚げて来たのだが、父は舞鶴に引揚船が着く度に手弁当で駆けつけては引揚者の世話をするのだった。その為に岩手には戻らずに東京に留まった。それは満州に残してきた同胞に対する当然の償いと考えていたからである。

ある年の大晦日の事である。遅配分の給料を懐に家路を急いでいると、バッタリと満州時代の知人に出会った。あまりしょげているので事情を聞くと、やっと舗装の仕事を請け負ったのに材料を買う金がなくて途方に暮れているとのことであった。幸い今日は懐が暖かい。父は彼に給料を半分あげてしまった。知人は男泣きしながら帰って行ったという。家に着きいきさつを話すと母は「よくあげてくれましたね。貧乏しているということは、他人の痛みがわかるということだからありがたいね。」と言ったという。

その頃の私の仇名は「ビンボー」であった。いつも腹を空かしていたが、卑屈に思ったことは一度もなかった。両親は貧乏を恥じるどころか喜んで受け入れていたのではないか。それは自分達が人生の大目標を持っていたからである。

満州時代を通じて培った〝民族の垣根を超えて世界平和建設の捨て石になろう〟という覚悟である。実現は極めて厳しくとも、人類誰もが希求するこの大目標に向かって歩みを止めてはならない。一人一人の強い願いがやがては世界を変える事が出来る。その思いがあったからこそ、自らの生活を楽しめたのではないか。

論語の一節に「富と貴とは是れ人の欲する所なり、貧と賤とは是れ人の悪（にく）む所なり」とある。心（仁）のありようを問うているのである。

願わくば、ホメラレモセズ　クニモサレズ　サウイフモノニ　ワタシハナリタイ